

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：34303

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20039

研究課題名（和文）『名語記』による鎌倉時代の語彙研究および『名語記』の本文校訂

研究課題名（英文）Lexical Study of the Kamakura Period Based on Myogoki and the Textual Revision of Myogoki

研究代表者

小林 雄一（KOBAYASHI, Yuichi）

京都先端科学大学・全学共通教育機構・講師

研究者番号：00964553

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：鎌倉時代成立の語源辞書『名語記』の掲載する語（掲出語）を『色葉字類抄』と対照した。その結果、『名語記』の掲出語全体（巻七を除く）の56%が『色葉字類抄』と共通するか部分的に一致するという結果を得た。また、巻二から巻六までの語彙の重なり方、漢字表記の合致の割合の傾向が、増補したそれ以降の巻と相違することがわかった。『名語記』の本文校訂については、宮津市前尾記念文庫を訪問し、翻刻の校訂作業を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『名語記』の掲載語彙は、鎌倉時代当時の言語を反映していると評され、また、俗語が多く含まれるとも言われるが、その実態は明らかではなかった。かつて拙稿において『名語記』が『色葉字類抄』を参照していることを指摘したが、今回の研究で、掲出語全体の半数以上が『色葉字類抄』と共通していることがわかった。これは『名語記』の掲載語彙の性質を考える上での手がかりとなることだろう。

研究成果の概要（英文）：I conducted a comparative analysis of the headwords listed in the Kamakura period etymological dictionary, Myogoki, with those in Iroha Jiruisho. The results revealed that 56% of the headwords in Myogoki (excluding Volume Seven) either completely or partially matched those in Iroha Jiruisho. Furthermore, it was observed that the overlap of vocabulary and the rate of correspondence in Kanji representation from Volumes Two to Six differ from the subsequent volumes that were added later. Regarding the textual revision of Myogoki, I visited the Miyazu City Maeo Kinin Bunko (Maeo Memorial Library) and advanced the work of revising the transcribing text.

研究分野：国語学（日本語学）

キーワード：名語記 古辞書 色葉字類抄

## 1. 研究開始当初の背景

鎌倉時代に成立した語源辞書『名語記』は、日本の語源辞書として現存最古のものである。全体で約 6000 条を有し、日本語に対して日本語で説明を加えている。そのような辞書は、『名語記』以前には歌語や古語を対象としたものしかなかったが、『名語記』は当時の言葉を幅広く集めて説明を加えており、本書を通じて当時の言語がどのようなものであったか、また、当時の人間が言葉をどう捉えていたのかを窺うことができる。

『名語記』は著者自筆本以外に伝本が確認されていない(抜粋は存在する)。1983年に翻刻が刊行されてから、研究に活用される機会が増えたが、『名語記』の記述の一部分を抜き出して利用するものが多く、『名語記』の全体を見通した研究は少なかった。また、影印が刊行されておらず、原本は閲覧が困難な状況にあって、翻刻に誤りと思しい箇所があると指摘されながらも、翻刻を通じて『名語記』を研究するしかない状況が続いている。

『名語記』の全体を見通した研究として、辞書の構造についての研究は既に行われてきている。しかし、『名語記』を辞書の系譜の中に位置づけるための研究は行われてこなかった。辞書の基礎的な研究として出典研究があり、辞書の収録語彙や注文の出处を調査することで、辞書を編纂する際にに基づいた資料や、資料の引用態度について考えることができる。しかしながら、『名語記』は書物の書名を挙げて引用することがほとんどなく、何らかの書物に基づく可能性は閑却されてきた。

申請者は、小林(2014・2015)において、『名語記』が取り上げる語と、それに対して示す漢字表記とのペアの多くが『色葉字類抄』に見出されることを指摘し、さらには、『色葉字類抄』特有の漢字表記が『名語記』にも見られることから、『名語記』の著者は、執筆の際に『色葉字類抄』を参照した可能性が高いことを明らかにした。

このことは、『名語記』の成立した鎌倉時代の言語を考える上で重要な意味を持つ。鎌倉時代は平安時代の諸分野の文章が文語化し、言文二途に分かれる時代と言われる。文語化した文章の中に交えられる口語的な要素を取り出すことで、文語化の裏で進む口語の変化を捉えるというのが、鎌倉時代の言語研究の常道であろう。

『名語記』は、俗語的な語を豊富に含むと評価されてきたが、掲載する言葉の全てが俗語というわけではない。前述の『色葉字類抄』の影響がどこまで及ぶのかということ进行调查することで、『名語記』がどの程度『色葉字類抄』の掲載する言葉を引き継いでいるのか、また、『色葉字類抄』にあっても引き継がなかったものは何か、さらには、『名語記』から『色葉字類抄』の影響を取り除いたとして残るものは何か、というように、『名語記』の掲載語彙の分別が可能になる。

## 2. 研究の目的

本研究では、次の(1)と(2)を研究の目的とする。

- (1)『名語記』と『色葉字類抄』の対照による『名語記』掲載語彙研究の精緻化
- (2)前尾記念文庫蔵の紙焼き写真本『名語記』による翻刻の校訂および、巻七の釈文の提供

## 3. 研究の方法

- (1)『名語記』と『色葉字類抄』の対照による『名語記』掲載語彙研究の精緻化

小林(2015)では、『名語記』の取り上げる和語(以下、「掲出語」とその漢字表記とのペアを『色葉字類抄』と対照し、『名語記』に漢字表記がある条の約 77%が『色葉字類抄』と一致ないし部分的な一致が見られると判断した。これは、『名語記』全体の約 46%に及ぶ。また、後半の巻九(四字の語を扱う)巻十(五字の語を扱う)において合致する割合が低下しており、それは『名語記』が掲出語を分割してそれぞれに漢字を当てるようになるため、『色葉字類抄』が掲載する漢字・漢語と合致しなくなるのだと考えた。

このような、『名語記』が『色葉字類抄』の漢字・漢語を採用しない条は、『名語記』が掲出語に対して漢字表記を示さない条にも存在すると考えられる。そのような条を、漢字表記がない条から抽出するため、『名語記』の漢字表記のない条について、『名語記』の掲出語が『色葉字類抄』に掲載されているかどうかを確認していく。

また、『名語記』の掲載語彙のうち、『色葉字類抄』にない語に着目したとき、小林(2016)で扱ったように、歌学に関わる語も含まれるが、それ以外の語はどのようなものなのか、近い時代の文献に現れる語なのか、あるいは『名語記』にしか見られない珍しい語なのか、分析を加えていく。

- (2)前尾記念文庫蔵の紙焼き写真本『名語記』による翻刻の校訂および、巻七の釈文の提供

京都府宮津市の前尾記念文庫(現在は宮津市教育委員会が管理)に『名語記』の紙焼き写真本が存在している。紙焼き写真は、前尾繁三郎が原本の所蔵者から贈られたものであり、紙焼き写真を公開することは不可能であるが、部分的な翻刻を学界に提供することは可能であろう。

『名語記』の正確な本文の提供のため、この紙焼き写真を利用して、『名語記』の翻刻の校訂

を行う。また、『名語記』の翻刻は巻七を欠くが、紙焼き写真によって巻七を翻刻する。

#### 4. 研究成果

##### (1) 『名語記』と『色葉字類抄』の対照による『名語記』掲載語彙研究の精緻化

2022年度に国語語彙史研究会の第129回研究発表会で「『名語記』と『色葉字類抄』(続々)」と題した発表を行った。発表では、『名語記』が掲出語に対して漢字表記を示さない条にも、『色葉字類抄』を参照したと思しき、めずらしい掲出語が見られることを指摘し、漢字表記を示さない条も『色葉字類抄』を参照した可能性があることを示した。『名語記』の掲出語全体では、翻刻がない巻七を除いて約56%が『字類抄』と共通するか部分的に一致しており、巻二から巻六までと、増補されたそれ以降の巻とで、『字類抄』との語彙の重なり方、漢字表記の合致の割合の傾向が異なることを報告した。本発表については、雑誌に掲載されていないため、投稿に向けて準備を進めている。

2023年度には雑誌『日本語学』に「『名語記』を読む」と題した文章を発表した。『名語記』による語義説明について、漢字音を導き出すための仮名反をなぜ和語に用いたのかということ、掲出語に漢字を示すことについて、『名語記』内部でも質的な相違があること、『名語記』内部で仮名反や漢字を用いた語義説明が使い回されている、といった未解決の問題を説明した。

##### (2) 前尾記念文庫蔵の紙焼き写真本『名語記』による翻刻の校訂および、巻七の釈文の提供

2023年度に前尾記念文庫を管理する宮津市教育委員会(宮津市立図書館)を訪問した。文庫での『名語記』紙焼き写真本の管理状況について説明を受け、紙焼き写真によって翻刻の校訂作業を行った。一度の作業で確認できる分量は多くはなく、現在、巻二(巻一は総論の巻であり、昭和初期に発見された段階で所在不明)の校訂が完了している。巻二59丁のうち、翻刻の誤りや補入を明示しない箇所は60箇所以上存在し、虫損箇所を補読して翻刻に示していない箇所も相当数あることがわかった。巻七の釈文については、一通りの翻刻作業は完了しているが、未判読の字も多く、公開するためには翻刻の精度を高める必要がある。

『名語記』の翻刻の校訂と巻七の釈文の作成は、引き続き作業を進め、何らかの形で学界に提供する予定である。

#### 参考文献

- ・小林雄一(2014)「『名語記』と『色葉字類抄』」(『国語国文』83-6)
- ・小林雄一(2015)「『名語記』と『色葉字類抄』続考」(『国語国文』84-4)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小林雄一	4. 巻 42-2
2. 論文標題 『名語記』を読む	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林雄一	4. 巻 4-1
2. 論文標題 書評 沖森卓也・木村義之編著『辞書の成り立ち』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学界通信 漢字之窗	6. 最初と最後の頁 55-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小林 雄一
2. 発表標題 『名語記』と『色葉字類抄』（続々）
3. 学会等名 第129回国語語彙史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林 雄一
2. 発表標題 高野山金剛三昧院蔵享徳三年寄進状に見える「類聚名義鈔」とその注記について
3. 学会等名 訓点語学会第130回研究発表会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本漢字学会	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 648
3. 書名 漢字文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------